

Agri Teachers

農業は、いのちを支える仕事

豊かな自然と確かな技術によって生み出されるおいしい農作物。
それは、やがて食卓に届き、私たちの生きる力に変わります。
農業は、いのちを支える大切な仕事です。

置賜には、農業に魅力ややりがいを感じ、熱い思いで農業に取り組む先輩がいます。
そんな先輩達（Agri Teachers）の言葉に触れ、仕事としての農業を
考えてみませんか。

地元の若手農業者「Agri Teacher」が、あなたの学校で農業の魅力を熱く、楽しく語ります！

派遣対象：置賜地域の各学校

【小学校(5・6年生)、中学校、高校】

活用例

◎立志式での講話として



夢を持って行動する若者との出会いを通じ、**将来の生き方を描く**契機に

◎職場体験として



社会人の話を聞くことで、**仕事をする**ことへの理解を深める機会に

◎食育・農業体験として



農と食について学び、**命の大切さや健全な食生活**について考える場に

Agri Teacher派遣までの流れ

申込み



時期・内容の調整



Agri Teacherの派遣
(出前授業の実施)



アンケート調査



アンケート結果のフィードバック



▲講義を行うAgri Teacher

これまでの活用実績

- ・米沢市立第一中学校
- ・米沢市立第五中学校
- ・米沢市立第四中学校
- ・高畠町立高畠中学校
- ・南陽市立沖郷中学校
- ・白鷹町立白鷹中学校
- ・川西町立川西中学校
- ・山形県立長井高等学校
- ・飯豊町立飯豊中学校
- ・米沢市立第二中学校
- ・米沢市立広幡小学校

※ 総合学習、道徳の時間など

●お申し込み、お問い合わせは

置賜農業振興協議会事務局
(置賜総合支庁農業振興課)

担当：小野寺・船山

〒992-0012 米沢市金池7-1-50

TEL 0238-26-6050



Agri Teacher派遣に要する費用は、全て置賜農業振興協議会が負担します。**学校の費用負担はありません(無料)。**

チバサン・ファーム

ごとうがいしゃ
合同会社

ちば ようへい
米沢市 / 代表 千葉 陽平 / 1975年生

～子ども達に伝えたいこと～
農業は、単に作物を作るだけでなく、未来の可能性が広がる仕事



【つくっているもの】
そば・小麦・米・人参・玉ねぎ



究極の野菜を探し求め、たどり着いた自然栽培

「ご縁があって高畠町の八百屋さんで仕事をさせてもらったときに、東京のお客様から『無農薬』の野菜の注文がありました。宅配ボックスに野菜を詰め合わせてお送りしたら大変喜ばれて」

以来、千葉さんは、究極の野菜を探し求め、自然栽培のにんじんにたどりついた。

「自然栽培のにんじんを食べて衝撃を受けました。農業をやることは決めて、あとはどうやったらできるかを考えていました」

千葉さんは、無肥料・無農薬、自然栽培にこだわったそば、野菜づくりに取り組む。「私のそばは値段が高いですが、お客様からお客様に口コミで広がり、全国各地から注文をいただいています」

現在は、道の駅米沢の加工施設の責任者を務めながら、中国・上海の日本人学校への「超」出前授業も行う。

「田舎だから宝物(農作物)ができる。農業を支えてくれた農家の方々に感謝し、未来につなげたい」

いとう とうま・ともこ 伊藤 稲馬・倫子

米沢市在住 / 1978年生・1980年生

～子ども達に伝えたいこと～
やりたいことを仕事にできる人は少ない。
まずは、今やっていることを続けてみようと思うことが大事



【つくっているもの】
肉用牛・繁殖用牛・米



家族仲良く働き暮らす様子に魅かれて

稲馬さんの実家は農家。なんとなく農家を継ぐものとの思いはあったが、大学時代にアルバイト先の牧場で、家族仲良く一緒に働きながら暮らしている様子に魅かれ、継ぐことを決心した。

千葉県出身の倫子さんは、全く農業を知らず畜産大学に入学。牧場実習経験から自分の牛を育てたいと思うように。

知り合った頃と同じような夢を抱いた二人は結婚し、

今は稲馬さんの両親と4人で「米沢牛いとう牧場」を営んでいる。家族みんなで働き暮らす日々は思い描いた生活ではあるものの、働き方や地域との関わりを含め、多くの課題に直面しているのも事実。

「米沢牛を育てることは置賜の伝統を引き継ぐことでもある」「農業は食・環境・暮らしなどと深く関わる仕事。体力も必須で、あらゆる知恵を使いながら工夫し、食べた人が笑顔になれる米沢牛を育てていきたい」



ほし ともや 星 智也

南陽市在住 / 1985年生

～子ども達に伝えたいこと～

仕事を自分でコーディネートできる農家だからこそ、趣味や地域活動にも思う存分取り組める。思いのまま人生を描こう。



【つくっているもの】

米・さくらんぼ・りんご・ラフランス

農家に生まれたからこそ、従来のやり方にとらわれず柔軟に

「農業はカッコいいし、頑張ればもうかります」星さんは爽やかに語る。手をかけた分だけ収量や品質として返ってくるし、試行錯誤しながら年1回しか収穫できないものをつくるのも醍醐味だ。

星さんの活動は幅広い。若手農家グループ「米部(こめぶ)」では、りんご入り堆肥を使ったオリジナル米を生産。地元小学校では田んぼの生き物調査の先生。中学校では米づくりを教える。自分で仕事を段取りできる農家だからこそ、様々な活動に取り組める。同世代

の農家の存在も心強い。農作業の悩みもLINEで皆が答えてくれ、酒を酌み交わし農業を熱く語る。

令和5年度から山形県青年農業士会会長、南陽市青年教育推進事業実行委員長を務める。

星さんの“裏”目標は「毎年国内外の旅行に行くこと」で、23歳から実現している。

これからの目標は、農業でやりたいことを具現化できる共同体を作ること。「コメ農家3人から仲間を増やしていきます！」すでに計画は進行中だ。



のうぎょうじよし

農業女子 あねちゃん AneChan

おおの みちよ

高畠町 / 代表 大野 美千代

～子ども達に伝えたいこと～

農業は命を繋ぐ大切な仕事。職業の中でもっとも歴史がありながら、今なお進化を続ける夢のある職業でもあると思います。



【つくっているもの】

ぶどう・さくらんぼ

農業は命をつなぐ大切な職業。女性の視点から農業をPR

「農業女子AneChan」は、若手女性農業者11人で構成されるグループ。女性の農業者が集えるコミュニティが少ないと考えていた大野さんが、同じ思いを抱く仲間と出会い、2016年に結成した。

メンバーが就農したきっかけは、家業を継いだり、農家に嫁いだり、研修後そのまま就農したりと様々。農業に携わる女性の視点から、子育てと両立しながら農作業を行う様子や、農業の魅力をSNSで紹介。

また、農業、音楽など様々な分野の人たちが地域を盛り上げる「たかはたSAI」の企画運営や各種イベントへの出店を通じて、農産物のPRに取り組む。

「人々が生きてゆくために欠かせない食べ物を作るのが農業。命を繋ぐ大切な職業だと思って従事しています」と語る大野さん。今後の抱負は、自分たちも楽しみながら、多くの人達に農業に興味を持ってもらえる活動を行っていくことだ。

のうじくみあいほうじん
農事組合法人 ばたけ
くだもの畠

さとう なおとし
高畠町 / 代表理事 佐藤 尚利

～子ども達に伝えたいこと～

夢や希望を温めてみよう。
農業をやりたいになったら、私たちが
サポートします。

【つくっているもの】

さくらんぼ・ラ・フランス・
りんご・ぶどう・もも・その他



次の100年は、俺たちがつなぐ

農家の高齢化や耕作放棄地の増加、熟練の技を持つ農家不足など果樹栽培を取り巻く課題が多い中、「くだもの産地」高畠町の活性化を目指し、若手果樹農家4人が「農事組合法人くだもの畠」を設立した。

「くだもの畠」は、農業者の高齢化により手放された果樹畑や耕作放棄地などを借受け、ラ・フランスをはじめ、りんご、さくらんぼ、ぶどうなど20品種以上の果樹を栽培している。「大切な農地は、新たな果樹農家が育つまでの間、我々が一時的にお借りし、

次の世代につなぐ。新たな果樹農家の育成もします」空き家をリフォームし、研修生を受け入れるための宿泊設備を備えた事務所を整備した。現在、研修生1人を受け入れ、「くだもの畠」のメンバーが技術指導を行っている。

「(代表理事である佐藤さんの)曾祖父が120年前にラ・フランスの栽培を始めた。次の100年は、俺たちがつなぐことが使命だと思っています」

さいとう きよと
齋藤 聖人

川西町在住 / 1988年生

～子ども達に伝えたいこと～

農業にはいろんな可能性がある。
やりたいことが出来る、本当の自分
が見つかる仕事が農業です。

【つくっているもの】

米



農業のイメージを変えたい。その信念が「スーツ農家」を生んだ

齋藤さんの実家は約400年続く米農家。2013年春に神戸からUターン就農し、初めての田植えの日、スーツを身にまとった。批判する声も多かったが、それでもスーツを着続けるのは、「農業のマイナスイメージを変えたい」という強い信念からだ。全国に類を見ない『スーツ農家』は注目を浴び、海外のメディアでも取り上げられた。

齋藤さんはSNSを中心に発信活動を行い、現在は

「農業の新しいカタチ」を表現するためにRICE ISというブランドを作り、様々な手法で活動している。多くの方が興味を持つことで、地域の農業を元気にしたい。

「夢は日本一の農家になることです。私が有名になれば農業のイメージは変わり、担い手確保の糸口になると思うんです。そのために、もっと地域の人たちと関わって信頼を得られるようになりたい」 齋藤さんは丁寧な言葉で語ってくれた。



かんの しゅんぺい
菅野 春平

長井市在住 / 1983年生

～子ども達に伝えたいこと～

あらゆる食べ物が簡単に手に入る時代に、自分が食べるものをどのように選ぶか、一緒に考えていきましょう。

#7

【つくっているもの】

米・大豆・養鶏

「土」と「いのち」の関係を大切にした循環する農業

菅野さんが営む菅野農園は、放し飼いの養鶏と水稲、大豆を組み合わせた循環型農園。農家に生まれ育った菅野さんは茨城県の農業大学卒業後に就農し、今年で21年目を迎えた。

菅野さんが作るお米は減農薬以下の水準で栽培し、肥料に自家製の鶏ふんを使用している。また、二フトリにストレスを与えないよう放し飼いで育てており、抗生物質が含まれた餌は与えない。他にも市内の豆

腐屋さんのおからや、提携農家が栽培する資料米を餌として与えている。

こうした菅野さんの営む農業の根底にあるのは、「自分の作った安全な食べ物を子どもたちに食べさせたい」という強い思いだ。お客さんの顔が見える直接取引にこだわるのも、商品と一緒に自分のストーリーを届けたいとの思いから。「顔なじみのお客様とお話すると、自分の農業の良さが再確認できます」



#8

いのうえ まさき

井上 昌樹

小国町在住 / 1976年生

～子ども達に伝えたいこと～

農業は、自分で考えたことを形にできるクリエイティブな仕事
日々の積み重ねが実を結んだときの達成感はひとしおです。

【つくっているもの】

米(酒米含む)・そば

手間暇かけたものが多くの人に届く喜び

井上さんは農家に生まれ育ち、高校卒業後5年間農業を学んだ後、23歳で就農。農業に頼らない有機農業を実践し、酒米やそばの栽培に取り組む。

農家の職場は田んぼや畑。職場環境を良くするのも自分次第だ。「土と向き合う仕事だから自分だけで完結しがち。でも、それでは発展しないんですよね」だからこそ、積極的に外に出て異業種の人とも交流し、広い視野を持つことを意識している。

娘さんにもよく仕事の話をする。「ホテルが棲む自然を残したい。人は田んぼで出来たお米を食べる。田んぼが子ども達の未来につながっているんです」

長年、田んぼの生き物観察会で消費者と交流を深める。そんな井上さんにはロックや漫画をこよなく愛する一面も。仕事も趣味も、熱く語る姿がとても印象的だ。

かぶしきがいしゃ

株式会社

サンファームしらたか

かたやま しょうへい

白鷹町／社員 片山 祥平／1994年生

～子ども達に伝えたいこと～

非農家でお金や設備、土地がなくても、法人就職という新たな農業のスタイルがあります！



【つくっているもの】

米・啓翁桜・えだまめ・
スイートコーン・メロン・その他



#9

中学校の職場体験で農業に魅力を感じ就職

片山さんは、白鷹町の「農事組合法人サンファームしらたか」の社員として農業に従事している。

「私の実家は非農家でしたが、中学2年生の時、たまたま職場体験が「サンファームしらたか」でした。当時、将来の職業は、どちらかと言えば製造業に進みたいと思っていました」

職場体験では、メロンの作業に従事。そのときに聞いた言葉が今も心に残っている。「農業は暑っついし、

寒いし、休みもなくて大変な仕事だけど『うめえ、うめえ』と言って食べてくれる人が居っから頑張れんだ」

現在、就職して10年目となり、スイートコーン、枝豆、葉物野菜を担当している。「責任を感じますが、収穫した農産物を食べてもらい『うめえがった』という感想を聞くと、やはり農業をやった良かったと感じます」「農業という産業には全く同じ作業が無く、毎日新鮮。手塩にかけた農作物を収穫するのは特別なものです」

やまがたけんらくのうぎょうきょうどうくみあい

山形県酪農業協同組合

せいねんぶ にしおきたましが
青年部 西置賜支部

こんの かくい
白鷹町／支部長 紺野 格栄

～子ども達に伝えたいこと～

牛は、手をかけた分、必ず返してくれる。
酪農は、自分の努力が返ってくる仕事



【育てているもの】

乳牛



#10

ヨコのつながりで、お互い助け合いながら酪農に取り組む

県内一の生乳生産量を誇る白鷹町。山形県酪農業協同組合青年部白鷹支部は、30代から40代の若手酪農家9人で構成される。定期的に勉強会を開催して技術を磨きつつ、酪農家同士の交流も深める。「おかげでヨコのつながりは強い。経営は個人だが、困ったときは助け合う。怪我で私が搾乳できないときも助けてもらい、心強かった」

酪農では「生と死」が身近だ。「牛は出産しないと

乳が出ない。出産には危険が伴い、生と死が隣合わせ。だからこそ、子牛が無事生まれたときには、命の奇跡を感じる」

「酪農は、自分で仕事を組み立てられるところがいい。生き物相手、仕事の休日がないのはつらいところ」「大型農業機械で牧草を刈ったり、搾乳ロボットを導入したりしているところもあり、牛好きはもちろん、機械好きにもおすすめです」



ふじかわ なおあき

藤川 直亮

飯豊町在住 / 1976年生

～子ども達に伝えたいこと～

子ども達には、視野を広げる取り組みと、その方法を学ぶことが大事なんだよと伝えたいです。



【つくっているもの】
きゅうり

探求を止めず工夫を続け、農業を未来につなぐ

「常に良い作物を収穫しようと考えていますね」と笑顔で話す藤川さんは、東京生まれ東京育ち。40歳の時にサラリーマンから農家に転身し、飯豊町に移住した。

藤川さんのこだわりは「作物にとって一番良い環境を提供すること」そのために毎日の作業前に30分ほど散歩し「作物が何を欲しがっているか表情を見て回っています」2棟のハウスは全自動で温度管理が徹底され、品質を安定させている。

その他にも試行錯誤を繰り返した結果、山形では類を見ない2月の定植を実現させている。サラリーマン時代のノウハウを活かし、独自に販路の拡大も行ってきた。気候変動などの影響により、これまでの農業の常識が通用しなくなるなか、作業の無い冬場でも品質向上のための努力を続けている。

今まで培われた農業の良いものは残しつつ、新しい工夫は惜しまない。「私は温故知新という言葉が大好きなんです」

